



加賀山耕一

Kagayama Kouichi

お遍路入門

人生こころもがえの旅

CHIKUMA SHINSHO

寺を持たぬ西行や山頭火の巡礼姿が向かう先には、くだんの宗教の枠を超え、すがすがしい何かがあるのではないか。一見きわめて宗教色の強そうな、宗教のものに映る巡礼・歩き遍路は、じつは既成の宗教からもっとも遠い存在なのではないか。巡礼の醍醐味は寺社の境内ではなく、旅の道中にこそあるのだ。……

ちくま新書

407



ちくま新書

407

お遍路入門——人生さろもかえの旅

二〇〇三年四月一〇日 第一刷発行

著 者 加賀山耕一（かがやま こういち）

発 行 者 菊池明郎

発 行 所 株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前二・五・三 郵便番号一一一・一八七五五
振替〇〇一六〇・八四一二三

装 幀 者 間村俊一

印刷・製本 株式会社精興社

ちくま新書の定価はカバーに表示してあります。

ご注文・お問い合わせ、落丁本・乱丁本の交換は左記宛へ。

さいたま市北区榑引町二六〇四 筑摩書房サービスセンター

郵便番号三三一・八五〇七

電話〇四八・六五一・〇〇五三

©KAGAYAMA Kouichi 2003 Printed in Japan

ISBN4-480-06107-X C0215

お遍路入門

お遍路入門【目次】

はじめに 〇〇9

序章 転機創造の歩き旅のススメ

〇11

なぜ八十八カ所あるのか

弘法大師と空海と

信仰心は必要か

第一章 歩き遍路の旅支度 〇39

出発前にすべきこと

お遍路ガイドブック事情(1)——真念という人

お遍路ガイドブック事情(2)——類本あらわる

巡拝プランいろいろ

旅費はいくらかかるのか？

歩き遍路の新知識

083

白装束は遍路の証明

菅笠の偉力

金剛杖の掟

納経帳の正体

納札の秘密

新旧へんろころがし

お通夜の方法

巡礼から見た現代

131

癒しの旅に非ず

会員ばやりの御時世なれど

さらば食べ放題

なぜ大病院で事故は起きるか

落書文化考察

歩き遍路の鉄則五力条

177

先手挨拶

接待に慣れるな 断るな

予定にこだわるな

独りゆくべし

あとにつづく遍路を想う

お遍路さんの未来

215

お遍路さんの未来

あとがき

226

参考資料



阿波

東



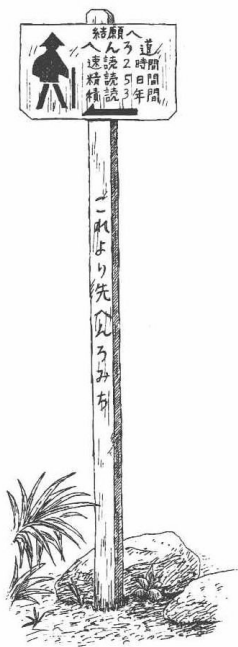
イラスト・挿画 小野塚 康江

はじめに

「巡礼」や「遍路」に関する本といえば、そのほとんどが札所寺院の故事来歴をしるす解説書か、個人の旅の体験をかたる紀行記に大別されるが、これから私の書くものまで、そうした趣向にすっぽりと納まるようであっては意味がない。

したがって本書に札所めぐりの観光案内を求めるなら、大いに期待はずれであろうし、また弘法大師をもちあげる内容を望まれても、それは無理というものである。私は四国八十八カ所の巡礼にすこしでも興味をもってくださった読者を裏切らぬよう、拙くも二度の歩き遍路の経験をもとに、私でなければ書けないことを書くことにする。喧噪の通勤途上あるいは静寂なる雪隠（トイレ）にまたがり読んでも、歩き遍路の核心について簡便に理解でき、読後いよよ四国に旅立つや、「読んでてよかった」となるは疑いなし。

時に広く世相に触れる読み物として、これまで誰も語らぬ遍路の真相に言及するのは、昨今の恐るべき遍路ブームに一石を投じたいと密かに願うからである。例によって旅行業者もしくはベテラン遍路が、本書を読んで血圧が急上昇しても、当方は一切関知しないからそのつもりで。結願を祈る。



序章

転機創造の
歩き旅のススメ



なぜ八十八カ所あるのか

日本には大小千以上もの巡礼地があると言われている。

ご存じ熊野から畿内にかけての西国さいごく三十三カ所を筆頭に、板東ばんとう、秩父ちちぶなど観音霊場は各地に置かれ、十二支霊場、十三仏じゅうさんぶつ霊場、なかには尼寺あまでら三十六カ所霊場といったもので、昭和平成の時代になおも新たな巡礼地が生まれている。

四国八十八カ所は言うにおよばず、どの名称にも巡るべき寺（札所）の「数」が記され、その数自体に何か宗教的な意味があるように見える。あらかじめ決められた数の札所を一つ一つたどる巡礼の方法は、巡礼地を構成する当然の枠組みにも思えるが、目を世界の巡礼地に転ずれば、むしろ日本ならではの特異な形態と言ってもよさそうである。

たとえばキリスト教徒のエルサレム巡礼にせよ、イスラムのメッカ巡礼にせよ、その到達地点が重要なのであって、旅の途中どの教会寺院を巡ったかは問題にならない。また近年注目されはじめたスペイン北部のサンチャゴ巡礼においては、四国遍路のうきようちようの納経帳のうきようちようのような「巡礼手帳」（クレデンシャル）を持ち、全長九百kmにおよぶ古道に点在する教会や巡礼宿で証明スタンプを押す習わしはあるが、その数まで決まっている訳ではない。

インドを巡るヒンズー教のブラジュ八十四里巡礼やカーシー五里巡礼にしても、全行程を示す距離は明記され、踏み進むべき聖地名（クラシュナ神の所在地）は大まかに決められているが、やはりその数については生粋のインド人に聞いても知らないという。

チベット仏教にいたっては、ラサへの巡礼が人生の目標のひとつになるほど重要な行事でありながら、そもそも特別の巡礼道というものが存在しない。各々の家から、馬車に乗り、あるいは家畜を伴い、なかにはシャクトリ虫のような五体投地をつづけ、別々の道を通ってひたすらポタラ宮をめざす。どれも「数」とは無縁の巡礼である。

さすがに中国には四大仏教聖地巡礼という言い方があるが、これも普陀山、峨眉山、五台山、九華山を順に巡るものではなく、それぞれ独立した山岳寺院を目指すルートが四つあることの総称に過ぎない。

ではなぜ日本の巡礼地だけが、これほどまでに札所の数を前面に出し、ともなう巡拝ルートを完全に固定化させているのだろうか。「札番なくば札所に非ず」と言われるのはなぜだろうか。

そもそも我が国の生活文化の慣習には、必要以上に「数」にこだわるものが少なくない。披露宴のご祝儀にいくら包むか。三万円では少ないと悩む場合、いっきに五万円に跳ね

上がる。四万円では四は死につながり、縁起でもないというのだ。病室に四号室を避け、銭湯の休みは四と九のつく日というくらいは愛嬌だが、任意の出費に四と九がつかえないのは合理主義者からすれば縁起でもない。四国九州を見習えと私はかねがね思い、勢い四万円に挑戦してみたい衝動に何度もかられながら、とかく三万まれに五万円にしてきた経緯もある。

単数が複数かに神経がいき、ラッキーセブンをいう程度の英語圏とも違い、数そのものに意味を見いだし、これほど現れる数の善し悪しに執着するのは日本だけではあるまいか。死苦と同音の四九を忌み嫌う心理は説明できても、字画に人生の吉凶を占う姓名判断などは、西洋人にいくら釈明しようが、その存在自体を信じてもらえそうにない。

四季の中に四字熟語の花を咲かせた日本人は、「数」一つ一つに特別の意味を感受できるまでに進化したのか、少なくとも数を冠した名称は、数学や物理の定数にも似た妥協を許さぬ定着ぶりを示していることは紛れもない。

おそらく欧米ならば、ベストスリーで足らなければベストフォーに増やすのは割合に容易であろう。ところが御三家などは、やたら御四家や御五家、腹が減っても御六家にする訳にはいかない。七人の侍は、八人では字面からして絵にならず、ましてや勝手に七福神を八福神にはできないのである。「三」には「三」の、「七」なら「七」の、なんとも説明

のつかない収まり方を示す独自のイメージがあるからである。

と同時に、かつて私は遍路道ぞいに位置する道後温泉（愛媛県松山市）に立ち寄った折、有馬温泉・湯崎温泉ゆのさきを加えて「日本三古湯」という言い方があるのを初めて知った。草津はどうした、別府は、と次々に浮かぶ名だたる古い温泉場をさしおくとはい、史実はともかく、これは排除の論理だな、とのぼせ気味にも直感した。

空海・橘逸勢くわいかいたちばなのはやなり・嵯峨天皇とくれば「三筆」であるが、これなども同レベルの大家が他にいたとして、その四人目五人目を黙殺するには、「三」という数による限定は極めて有効にちがいない。同等の実力があるうと、その他の俊才は世間にあっさり忘れていただき、三筆だけを特化させてしまう威力があるのだ。惜しくも八十八に漏れた寺院は、今日の札所の隆盛を、さぞやニガニガしく思っているのではないか。

あるいは世界三大美人など、クレオパトラ、楊貴妃という文句の出ない有名をもちだし、ここに身びいきにも小野小町を加えて、強引に同列にあつかい、いずれ同列に思えてくるのを期待しての仕掛けが、三大〇〇の類に多いのではないか。

また、怪しげな悪書追放など、「読まない、見せない、売らせない」の「悪書三ない運動」だと語呂よく言えば、ふと「三ない運動」に根拠や効果があるかのような錯覚をもたせる。さも良い運動をしているとの妄想すら抱かせかねない力の根元は、なによりわかり